

久芳頼正先生に多大な御協力をいただきましたことを感謝申し上げます。またデータ入力をしてくださった4人の日文科2年生の皆さんにも御礼申し上げます。

引用文献

- 金田一春彦監修『明解日本語アクセント辞典』第二版 三省堂 1992
菅野 謙・臼田 弘・最上勝也・宗像朋子「NHK アナウンサーのアクセント19年の変化」『放送文化研究年報』27, 1982, 271-334
日比谷潤子「アクセントの変化と変異—2・3・4・5・6拍 形容詞—」*Sophia Linguistica* 28, 1991, 25-35
今田滋子『教師用日本語教育ハンドブック⑥発音』国際交流基金 1981
水谷 修・大坪一夫『音声と音声教育』文化庁 1970

参考文献

- 日比谷潤子「形容詞アクセントの変化と変異—ランダムサンプリング調査の結果から—」『慶応大学言語文化研究所紀要』23 1991, 137-146
杉藤美代子「アクセントのゆれ」『日本語学』Vol. 2, No. 8 1983, 15-26

日比谷(1991)は、上述の菅野等の調査方法を踏襲して、東京出身の男女10人のアクセントを調査したパイロットスタディーである。話者の年齢は19歳から31歳である。その結果をみると、連体形では話者全員が全ての語を平板型で発音しているのに対し、終止形では各語につき6~9人が起伏式で発音している。今回の調査と比べると、終止形の起伏化の程度はほぼ同じであるが、連体形は日比谷(1991)の調査の話者のほうが平板型を保持している。

日比谷(1991)は、「形容詞のアクセントについては、これまで定説となっていた型の区別が失われつつあり、二本立てだった規則の体系が一本化している。この新たな合一型の体系では、

①すべての形容詞にはアクセント核があり、終止形のうしろから二番目の母音に*が付与される。(*はアクセント核を指す。筆者注)

②各活用形では、stem最後の母音に*が置かれる。

今のところ、連体形はこの限りではないが、時代の流れについて、合一していくかもしれない。仮に合一型の文法に統一されるとすれば、辞書にアクセントの位置を指定する必要はない。すべて規則的に導き出せることになり、習得は容易である。」(p. 30)と述べている。今回の調査結果も、この日比谷の考察と合致するものである。

5.2 結論

共通語の形容詞のアクセント型は、多数派の中高型と少数派の平板型の2グループがあり、各活用形のアクセントはグループごとに規則的に決まると従来は言われてきた。しかし、近年この体系には変化がおこっている。首都圏在住の10代後半の女性話者を対象に調査したところ、終止形においては、平板型のアクセントが起伏式で発音され、アクセント型の区別がなくなっているのに対し、連体形においては平板型を保持しているものが多いことが分かった。この傾向は首都圏出身者に顕著である。連体形においても終止形と同様、起伏式のアクセントが優勢な語もあり、これらは平板型のアクセントから起伏式に移行したものと考えられる。アクセントによる意味の弁別はあまり行われておらず、むしろ語の境界表示機能の方が強く働いているのではないかと思われる。

謝 辞

今回の調査のデータ処理につきましては、総合科目の情報処理を御担当の

5. 考 察

5.1 先行研究との比較

今回の調査結果を先行研究と比較してみたい。形容詞アクセントの変化を調査したものには、日比谷(1991)、菅野他(1982)がある。

菅野他(1982)は「NHK アナウンサーのアクセント 19年の変化」という題で、アクセントの現実の変化をとらえる一つの方法として、放送文化研究所が1981年に全国のアナウンサー545人の協力を得て行ったアクセント調査の結果の分析である。この調査の調査項目は424項目であるが、そのうち形容詞は「赤い、明るい、忙しい、痛い、うっとうしい、おいしい、多い、重たい、悲しい、きびしい、苦しい、こむずかしい、こやかましい、少ない、狭い、ない、なつかしい、生やさしい、にがい、低い、深い、むずかしい、むなしい」である。調査した活用形は語によって異なっている。このうち、終止形と連体形の両方の結果があげられているのは、「赤い、明るい、おいしい、重たい、悲しい」の5語である。これらの5語は従来、平板型のアクセントを持つと言われているものである。

結果を見ると、連体形はほぼ平板型のアクセントを保っているが、終止形にはばらつきがみられる。特に起伏化が進んでいるのは「おいしい」で、起伏と平板が半々になっている。今回の調査(1994)と比較してみると、今回の調査の方が終止形の起伏化が著しいが、終止形と連体形の分化という点では、共通している。菅野(1982)は調査対象がアナウンサーであり、今回の調査の話者よりも年齢が高く、また職業柄、より規範的な話し方をしていると考えられる。

表6 日比谷(1991)の調査と今回の調査(1994)の比較

	終止形		連体形	
	起伏	平板	起伏	平板
赤い	80% (68.5%)	20% (31.5)	0% (10.3%)	100% (89.7%)
明るい	60 (67.8)	40 (32.2)	0 (4.8)	100 (95.2)
おいしい	80 (89.0)	20 (11.0)	0 (7.5)	100 (92.5)
重たい	70 (89.0)	30 (11.0)	0 (13.0)	100 (87.0)
悲しい	90 (86.3)	10 (13.7)	0 (12.3)	100 (86.7)

注) ()内は今回の調査(1994)の結果を小数点第1位までのせた。

がり目をおかず平板型で平らに次の名詞に続けて発音する。アクセントには①語の意味の弁別機能と、②語と語の切れ目を示す境界表示的機能があると言われるが、形容詞のアクセントでは意味の弁別機能よりも境界表示機能のほうが優れていると言えるのではないだろうか。

4.5 結果のまとめ

以上、今回の調査の結果わかったことをまとめると次のようになる。

- ①首都圏出身者は、従来平板型だと言われていた形容詞を、終止形においては後ろから2番目の拍にアクセント核を置く中高型で発音する傾向が強い。ただし、語によって起伏化しやすいものとそうでないものがある。起伏化しやすいのは、4拍語の「イヤシイ」「ヨロシイ」で、起伏式で発音する話者が90%を越えている。これに対し、起伏化しにくいものは「トーイ」である。
- ②首都圏出身者は、従来平板型だと言われていた形容詞を連体形においては平板型で発音している。ただし、「イヤシイ」「ヨロシイ」については起伏式が優勢である。
- ③首都圏以外の出身の話者は、首都圏出身者よりも終止形において平板式のアクセントを使う傾向が見られる。
- ④アクセントによる同音異義語の区別はあまりなされていない。ただし終止形よりも連体形の方が、区別をする話者の割合は多い。

表5 NHK アナウンサーの調査(1982)と今回の調査(1994)の比較

	終止形		連体形	
	起伏	平板	起伏	平板
赤い	12% (68.5%)	88% (31.5)	0% (10.3%)	100% (89.7%)
明るい	15 (67.8)	85 (32.2)	1 (4.8)	99 (95.2)
おいしい	50 (89.0)	50 (11.0)	4 (7.5)	96 (92.5)
重たい	14 (89.0)	86 (11.0)	0 (13.0)	100 (87.0)
悲しい	46 (86.3)	53 (13.7)	5 (12.3)	95 (86.7)

注) () 内は今回の調査(1994)の結果を小数点第1位までのせた。

表3 「暑い」と「厚い」のアクセントによる区別（活用形別）
 終止形 (話者 146 人) 連体形

厚い	暑い		厚い	暑い	
	起伏	平板		起伏	平板
起伏	96 人	3	起伏	24 人	6
平板	40	7	平板	75	41

表4 「暑い」と「厚い」のアクセントによる区別（総合）

終止形	連 体 形				計
	厚=暑 (起)	厚=暑 (平)	厚 (平)≠暑 (起)	厚 (起)≠暑 (平)	
厚=暑 (起)	19 人	31	43	3	96
厚=暑 (平)	0	0	3	0	3
厚 (平)≠暑 (起)	3	8	28	1	40
厚 (起)≠暑 (平)	2	2	1	2	7
計	24	41	75	6	146

- 2 厚い=暑い (起伏) 厚い=暑い (平板) 31 人
 3 厚い (平板) 暑い (起伏) 厚い (平板) 暑い (起伏) 28 人
 4 厚い=暑い (起伏) 厚い=暑い (起伏) 19 人
 5 その他 25 人

最も多いグループは、終止形では共に起伏式で区別がないが、連体形はアクセントで区別しているという組合せである。次に多いのは終止形は起伏、連体形は平板という組合せで、アクセントによる区別をしていない話者である。3番目に多いのは、終止形・連体形ともに、厚い (平板) 暑い (起伏) という規範的なアクセントで同音異義語を区別しているグループである。4番目は終止形、連体形ともに起伏式で、アクセントによる区別をしていない話者である。この結果を見ると、アクセントによる意味の弁別はあまり機能していないが、終止形か連体形かという区別をアクセントで行っている傾向が伺える。これは形容詞に後続する名詞があるか、ないかという区別である。後続する名詞がない終止形の場合は、アクセントの下がり目を置き、これで文が終ることを示す。これに対し、後続する名詞のある場合は、アクセントの下

375 (28) 形容詞アクセントの実態調査

おり、首都圏以外の出身者は 26 人と少数である。出身地が首都圏かそれ以外かに分けて集計した結果をグラフ 3 に示す。このグラフは 4.1 で示したグラフ 2 と同じように起伏式と平板式の分岐点を線をつないだもので、山が高いほど起伏式で発音される割合が高く、山が低いほど平板式で発音される割合が高いことを表している。

終止形においては、本来起伏式である 2 (アオイ) と 19 (暑い), および 24 (イケナイ) と 31 (ヨロシイ) において首都圏出身者とそれ以外を示す 2 本の線は同じように高くなっているが、全体的に首都圏出身者のほうが起伏式で発音する割合が高いことがわかる。

それに対して連体形では、2 本の折れ線はほぼ重なっており、平板式が多いという同じような傾向を示しているが、部分的には首都圏以外の出身者のほうが起伏式の割合が高い語もある。また本来起伏式である 19 (暑い) については、首都圏以外の出身者の方が、起伏式の割合が高く、規範的であると言えよう。

4.4 意味の区別

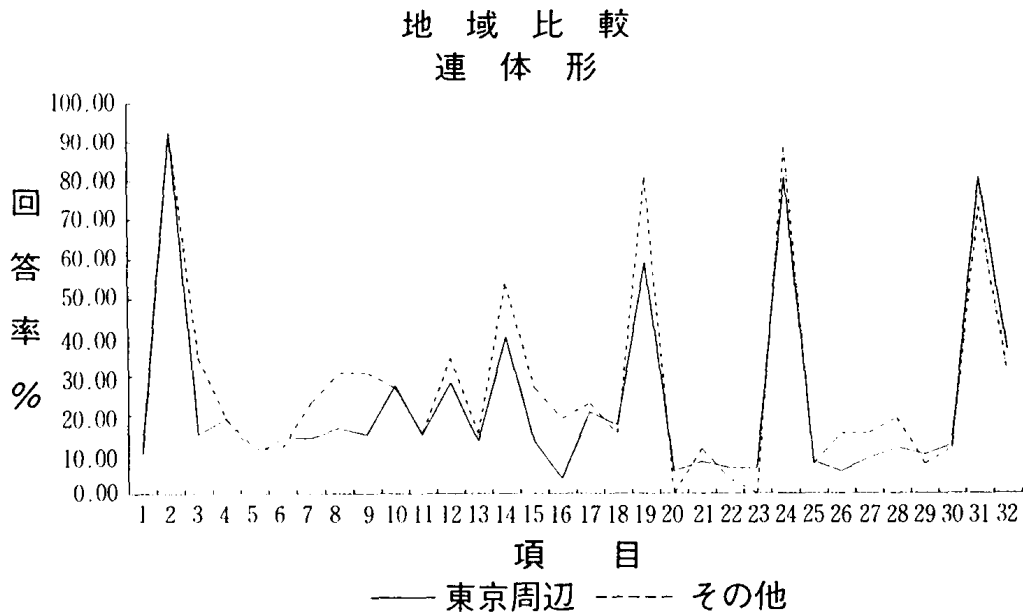
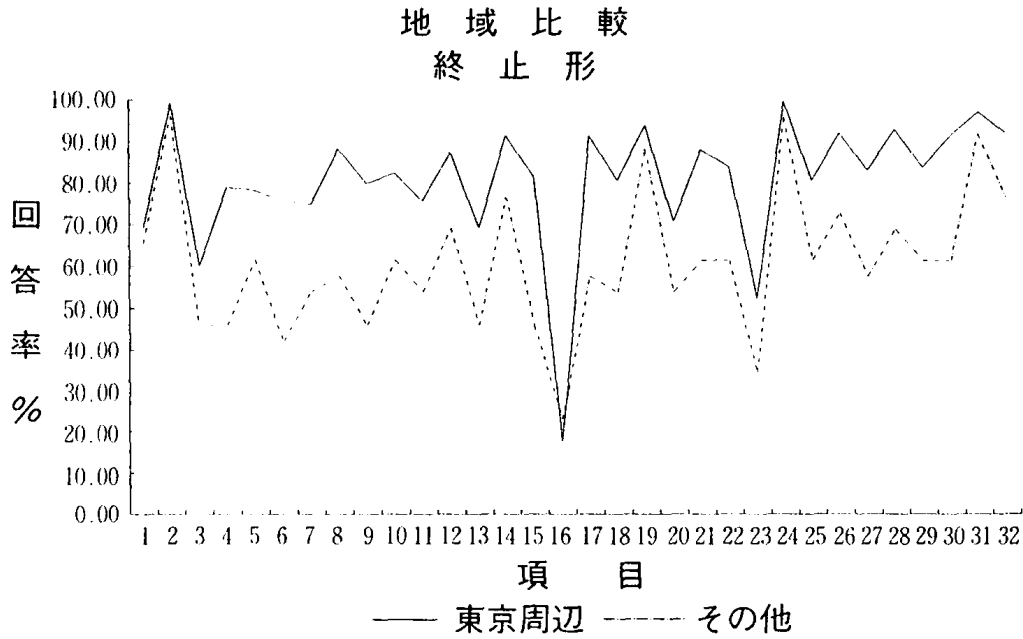
「厚い」と「暑い」は形容詞の同音異義語で、アクセントで意味を区別する。今回の調査ではこの区別はどの程度なされているだろうか。

終止形では、「暑い」と「厚い」をアクセント辞典の通りに発音しわけている話者は 40 人で 27.4%にあたる。両方の語を起伏式に発音してアクセントの区別のない話者は 96 人で 65.8%にのぼる。また共に平板型で発音している話者も 7 人いる。終止形においてはアクセントによる同音異義語の区別はあまりなされていないと言えよう。

連体形では、「暑い」と「厚い」をアクセント辞典の通りに発音し分けている話者は 75 人で 51.4%と半数を越えており、終止形よりも規範的なアクセントが見られる。アクセントの区別のない話者は 65 人 (44.5%) である。このうち両方の語を起伏式に発音するのは 24 人 (16.4%) と終止形に比べてずっと少ない。これに対して両方とも平板型で発音する話者が 41 人 (28.1%) にのぼっている。

表 3 を一つにまとめた結果を表 4 に示す。終止形と連体形の組合せで多いものを順にしめすと次のようになる。

終止形	連体形
1 厚い=暑い (起伏)	厚い (平板) 暑い (起伏) 43 人

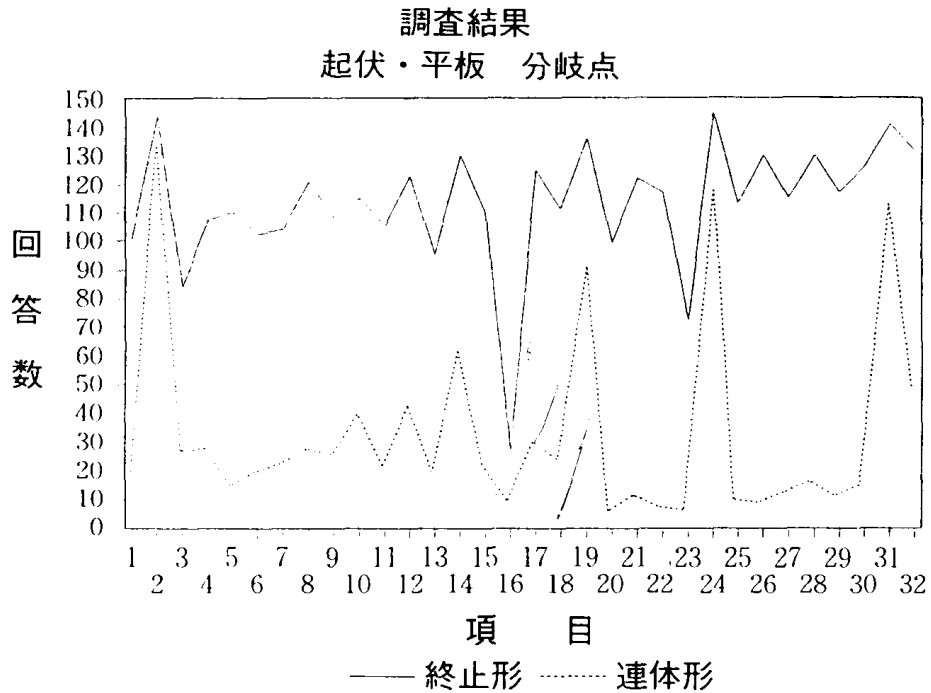


グラフ 3

することが多いとは必ずしも言えないことがわかる。

4.3 出身地別の傾向

4.2において個人別の集計を行ったところ、出身地による差異が見られた。この調査では全話者 146 人のうち、首都圏出身者が 120 人 (82.8%) を占めて



グラフ 2

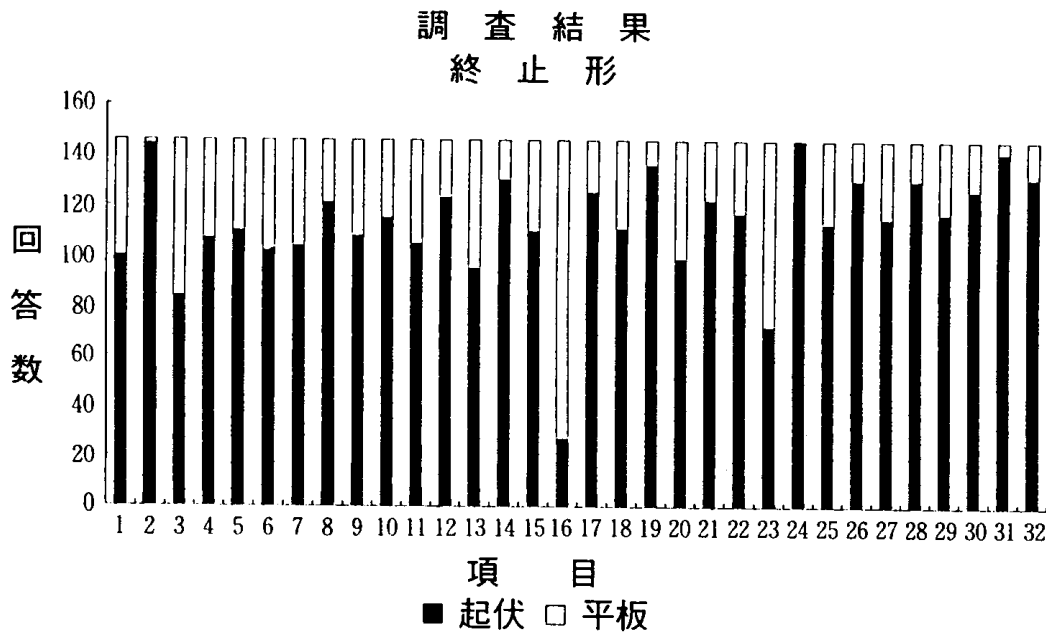
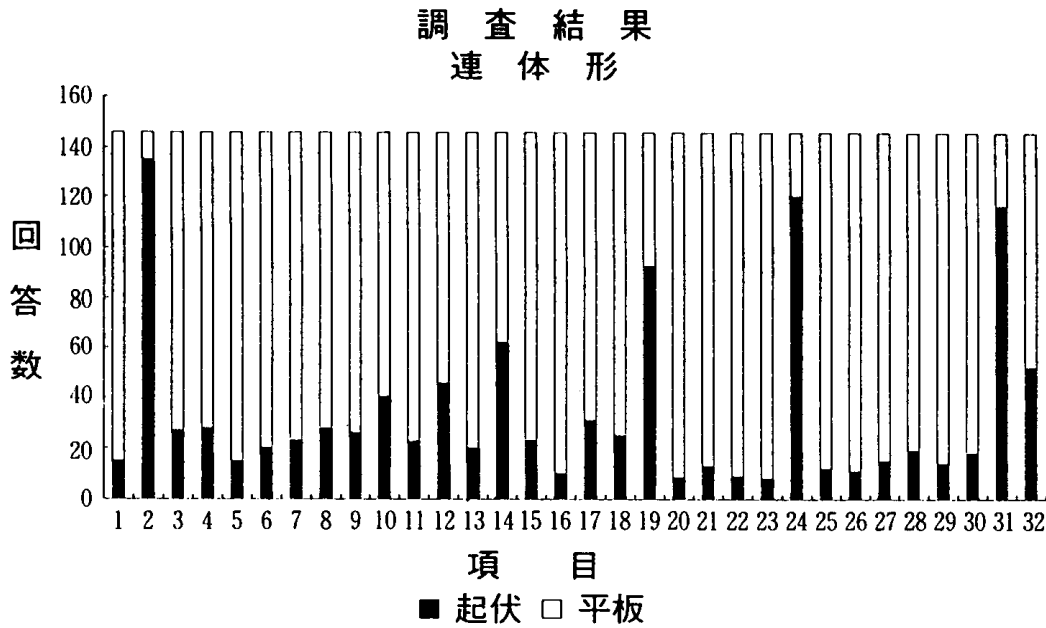
16 (トイ) の終止形にその傾向が著しい。

4.2 個人別の傾向

全体としては 4. 1 に述べたような傾向が指摘できるが、一人一人のアクセントを見ていくと個人差があることに気が付く。

まず終止形において中高化の特に著しい話者と平板型のアクセントを維持している話者がいる。32 語全部を通して起伏式の方が平板式よりも多い話者は 146 人中 125 人で 85.6% を占める。そのうちすべての語を起伏式で発音した話者が 7 人いる。この 7 人のうち 5 人は首都圏出身者である。これとは逆に、平板式が優位で起伏式が 4 語しかなかった話者が 3 人いる。これら 3 人の出身地は新潟、静岡、長野で、首都圏出身者はいなかった。

連体形では傾向が逆転し、32 語を通して平板式の方が起伏式よりも多い話者は 146 人中 132 人で 90.4% にのぼる。起伏式のほうが平板式よりも多かったのは 14 人と少数派である。この 14 人のうち、13 人は終止形、連体形ともに起伏式の方が平板式よりも多いという一定の傾向を示している。先に述べた終止形において起伏式が 100% であった 7 人について見ると、このうち 1 人は連体形でも起伏式の方が多かったが、残りの 6 人は連体形では平板式の方が多かった。終止形で起伏化の著しい話者が連体形でも起伏式で発音



グラフ 1

をいっしょに示してある。山が高くなっているのは起伏式で発音されることが多い語である。終止形、連体形ともに山の高くなっている語は2 (アオイ), 19 (暑い), 24 (イヤシイ), 31 (ヨロシイ) であることが見て取れる。ただし、連体形において19 (暑い) の山の高さが他の3語よりも低いことに注目したい。逆に谷になっているのは平板型で発音されることが多い語であり、

表 2 続き

項目	アクセント辞典	終止形		連体形	
		起伏式	平板式	起伏式	平板式
17 眠い	平板	125人 85.62%	21人 14.38%	31人 21.23%	115人 78.77%
18 丸い	平板	111 76.03	35 23.97	25 17.12	121 82.88
19 暑い	起伏	136 93.15	10 6.85	92 63.01	54 36.99
20 明るい	平板	99 67.81	47 32.19	7 4.79	139 95.21
21 あやしい	平板	122 83.56	24 16.44	13 8.90	133 91.10
22 あぶない	平板	117 80.14	29 19.86	9 6.16	137 93.84
23 いけない	平板	72 49.32	74 50.68	8 5.48	138 94.52
24 いやしい	平板 起伏	145 99.32	1 0.68	120 82.19	26 17.81
25 きいろい	平板	113 77.40	33 22.60	12 8.22	134 91.78
26 おいしい	平板	130 89.04	16 10.96	11 7.53	135 92.47
27 冷たい	平板	115 78.77	31 21.23	15 10.27	131 89.73
28 おもたい	平板	130 89.04	16 10.96	19 13.01	127 86.99
29 やさしい	平板	117 80.14	29 19.86	14 9.59	132 90.41
30 悲しい	平板	126 86.30	20 13.70	18 12.33	128 87.67
31 よろしい	平板	141 96.58	5 3.42	116 79.45	30 20.55
32 むずかしい	平板	131 89.73	15 10.27	52 35.62	94 64.38

表2 全体の集計

項目	アクセント辞典	終止形		連体形	
		起伏式	平板式	起伏式	平板式
1 赤い	平板	100人 68.49%	46人 31.51%	15人 10.27%	131人 89.73%
2 青い	起伏	144 98.63	2 1.37	135 92.47	11 7.53
3 浅い	平板	84 57.53	62 42.47	27 18.49	119 81.51
4 厚い	平板	107 73.29	39 26.71	28 19.18	118 80.82
5 甘い	平板	110 75.34	36 24.66	15 10.27	131 89.73
6 粗い	平板	102 69.86	44 30.14	20 13.70	126 86.30
7 薄い	平板	104 71.23	42 28.77	23 15.75	123 84.25
8 遅い	平板	121 82.88	25 17.12	28 19.18	118 80.82
9 重い	平板	108 73.97	38 26.03	26 17.81	120 82.19
10 軽い	平板	115 78.77	31 21.23	40 27.40	106 72.60
11 固い	平板	105 71.92	41 28.08	22 15.07	124 84.93
12 きつい	平板	123 84.25	23 15.75	43 29.45	103 70.55
13 暗い	平板	95 65.07	51 34.93	20 13.70	126 86.30
14 けむい	平板	130 89.04	16 10.96	62 42.47	84 57.53
15 づらい	平板	110 75.34	36 24.66	23 15.75	123 84.25
16 遠い	平板	27 18.49	119 81.51	10 6.85	136 93.15

(93.1%) を越えている。中高化の進んでいる順に語を並べると次のようになる。

イヤシイ (99.3%) ヨロシイ (96.5%) ムズカシイ (89.7%)
 オモタイ・オイシイ・ケムイ (89.04%) カナシイ (86.3%)
 ネムイ (85.6%) キツイ (84.3%) アヤシイ (83.6%) オソイ (82.9%)
 アブナイ・ヤサシイ (80.1%) カルイ・ツメタイ (78.8%)
 キイロイ (77.4%) マルイ (76%) アマイ・ツライ (75.3%)
 オモイ (74%) アツイ (73.3%) カタイ (71.9%) ウスイ (71.2%)
 アライ (69.9%) アカイ (68.5%) アカルイ (67.8%) クライ (65.1%)
 アサイ (57.5%) イケナイ (49.3%) トーイ (18.5%)

連体形について見ると、本来起伏式の2語のうち「アオイ」はほぼ起伏式で発音されている。(92.47%) それに対して「暑い」は約6割の話者が起伏式で発音しているにすぎない。平板式と言われていた30語は、終止形とは異なり、連体形においてはほとんどが平板式で発音されている。ただし、「イヤシイ」と「ヨロシイ」の2語については、連体形においても起伏式で発音する者が約8割いる。この2語は終止形において最も起伏式で発音される割合が高い語であり、終止形および連体形の両方において平板式から起伏式への変化が著しいと言えよう。その他の語については、「ムズカシイ」と「ケムイ」が起伏化される傾向が比較的多い。この2語も終止形において起伏式で発音されることの多い語である。

以上をまとめると次のような傾向が指摘できるだろう。

- ①平板型とされていた形容詞30語のうち、トーイとイケナイを除く28語が終止形において、後ろから2番目の拍にアクセント核を持つ中高型で発音されている。
- ②連体形の場合は、終止形において中高型で発音された語も、平板型で発音されるものがほとんどである。ただし、イヤシイとヨロシイについては、終止形、連体形ともに中高化しており、平板式から起伏式のグループに移行したと言えよう。
- ③本来起伏式のアクセントを持つ「暑い」は連体形において、起伏式で発音される割合が下がっている。

以上の傾向を確認するためにグラフ2を参照されたい。この折れ線グラフはグラフ1の起伏式と平板式の分岐点を線で結んだもので、終止形と連体形

出身地の集計

首都圏 (120 人)		首都圏以外 (26 人)			
神奈川県	75 人	大阪府	5 人	山梨県	1
東京都	40	新潟県	4	長野県	1
埼玉県	2	静岡県	3	青森県	1
千葉県	3	福岡県	2	愛知県	1
		福島県	1	徳島県	1
		北海道	1		
		不明	5		

3.4 データ収集方法

LL 教室で調査語 32 語の終止形と連体形（形容詞＋名詞）の書かれた紙を読みあげ録音する。アクセントの聞き取りは、発音した本人と筆者の 2 名が行った。調査を実施したのは 1993 年 11 月である。

4. 結 果

4.1 全体の傾向

32 語の形容詞の終止形と連体形のアクセント型は、アクセント核のない平板型か、後ろから 2 番目の拍にアクセント核のある中高型（起伏式）のいずれかであった。表 2 及びグラフ 1 は、調査した 32 語について終止形と連体形別に、平板型で発音した話者と起伏式で発音した話者の人数と割合を示している。

終止形を見ると、本来起伏式の 2 語「アオイ」「暑い」は、ほぼ起伏式で発音されている。（青い 98.63%、暑い 93.15%）平板式と言われていた 30 語のうち、28 語は過半数の者が起伏式で発音しているが、「トーイ」「イケナイ」の 2 語については傾向が異なる。「トーイ」は起伏式が 18.5%、平板式が 81.5%で平板式が優位である。これは tooi という母音の連続する箇所アクセント核を置きにくいという音声上の理由によると思われる。「イケナイ」は起伏式、平板式が半々である。

中高化の著しい語は、「イヤシイ」で、1 名を除いて全員がイヤシイと発音している。（99.3%）この形容詞はアクセント辞典でも、平板と起伏の両方の型が認められており、今回の結果もこれを裏付ける形になっている。「ヨロシイ」も 96.5%が中高型で発音している。これらは本来起伏型である「暑い」

いるかを調べる。

3.2 調査した語, 語数

終止形においてアクセント核を持たないとされている 30 語について, 終止形と連体形を調査する。また, 比較対照のためにアクセント核を持つとされる形容詞 2 語 (アオイ, アツイ (暑い)) も調査語に入れる。特に, アツイ (暑い) とアツイ (厚い) はアクセントで意味の区別をされると言われているが, 実際に異なるアクセントで発音されているかどうか確かめる。

調査語

1 アカイ (赤い)	2* アオイ (青い)	3 アサイ (浅い)
4 アツイ (厚い)	5 アマイ (甘い)	6 アライ (粗い)
7 ウスイ (薄い)	8 オソイ (遅い)	9 オモイ (重い)
10 カルイ (軽い)	11 カタイ (固い)	12 キツイ
13 クライ (暗い)	14 ケムイ (煙い)	15 ツライ
16 トーイ (遠い)	17 ネムイ (眠い)	18 マルイ (丸い)
19* アツイ (暑い)	20 アカルイ (明るい)	21 アヤシイ (怪しい)
22 アブナイ		23 イケナイ
24 イヤシイ (卑しい)		25 キイロイ (黄色い)
26 オイシイ		27 ツメタイ (冷たい)
28 オモタイ (重たい)		29 ヤサシイ (優しい)
30 カナシイ (悲しい)		31 ヨロシイ
32 ムズカシイ (難しい)	注) 2, 19 の*印は起伏式の語	

3.3 対象者

神奈川, 東京近郊に在住の女子短期大学 1 年生 146 人を対象に調査を行った。これらの学生は平成 5 年度に本学の日本語日本文化学科 1 年に在籍し, 筆者の担当する日本語基礎演習を受講した。年齢は 18-19 歳である。対象者は性別, 年齢層, 職業という属性において等質な集団であるが, 出身地については少しばらつきがある。出身地は生まれてから 15 歳くらいまでの間に一番長く住んでいた場所を都道府県単位で答えてもらった。首都圏出身者が 146 人中 120 人 (82.2%) をしめていることがわかる。

の4語のうちイヤシイについては、 $\overline{\text{イヤシイ}}$ 、 $\overline{\text{イヤシ}}\text{イ}$ の両方がアクセント辞典に載っているが、他の3語は平板型として登録されている。

2.3 『アクセント辞典』は、近年若い人々の間で次のような中高化傾向が見られると述べている。

①平板式形容詞の終止形を中高型に発音する。

例： $\overline{\text{アカイ}} \rightarrow \overline{\text{アカ}}\text{イ}$ 、 $\overline{\text{ツメタイ}} \rightarrow \overline{\text{ツメタ}}\text{イ}$

ただし、連体形は $\overline{\text{アカイモノ}}$ 、 $\overline{\text{シロイモノ}}$ のように平板式と起伏式の区別があって動かない。そこでこの辞典では連体形のアクセントを重視し、必ずしも若い層の新しい変化型を注記しない方針をとっている。

②起伏式形容詞の連用形・假定形のアクセントの高さの山を一拍後ろにずらして発音する。

例： $\overline{\text{シロク}}$ 、 $\overline{\text{シロクテ}} \rightarrow \overline{\text{シロ}}\text{ク}$ 、 $\overline{\text{シロクテ}}$

『音声と音声教育』は平板型のものが中高化する傾向について、東京生まれの人でも終止形が完全に中高ばかりになっている人もあると言っている。また日比谷(1991)も同様の報告をしており、「形容詞のアクセント体系は合一化して、全般的には単純化の方向に向かっている」と述べている。

以上、アクセントの規則について従来の説と、新しい傾向について概観した。

3. 調査方法

本研究では、平板型のアクセントを持つ形容詞が、中高型で発音される傾向が若年層でどの程度進んでいるか、その実態を明らかにするために以下のような調査を行った。

3.1 目的

この調査は次の点を調べることを目的としている。

形容詞の終止形において、アクセント核を持たないグループと後ろから2番目にアクセント核を持つグループの2つがあると言われているが、果して実際にはどうなっているか。アクセント核を持たないとされている30語(今田)がどの程度、中高化しているかを明らかにする。また、形容詞の終止形と連体形は同じアクセント型で発音されると言われているが、実際にはどうか。終止形で中高化した語は連体形でも中高化するか、または平板型を維持して

表1 形容詞の活用形のアクセント (明解日本語アクセント辞典)

			終止・連体形	未然形	連用形	假定形
平板式	3拍	アカイ	アカイ アカイ (モノ)	アカカロ ¹ (ー)	アカク アコー アカク (テ) アカカッ (タ)	アカケレ (バ)
起伏式	3拍	シロイ	シロイ シロイ (モノ)	シロカロ ¹ (ー)	シロク シロー シロク (テ) シロカッ (タ)	シロケレ (バ)

2.2 形容詞のアクセント型の2つのグループとは、終止形がアクセント核を持つものと、持たないものと言い替えることもできる。各グループに属する形容詞の語数を見てみると、ほとんどの形容詞がアクセント核を持つグループに属しており、アクセント核のない、いわゆる平板型は少数派である。『日本語アクセント辞典』は、平板型の形容詞として次の27語をあげている。

赤い 浅い 厚い 甘い 荒い 薄い 遅い 重い 固い 軽い
 きつい 暗い 煙い つらい 遠い 眠い 丸い
 明るい あぶない 怪しい おいしい 悲しい 冷たい 優しい
 易しい よろしい むずかしい

今田(1981)は平板型の形容詞として次の30語をあげている。

アカイ (赤い) アサイ (浅い) アツイ (厚い)
 アマイ (甘い) アライ (荒い) ウスイ (薄い)
 オソイ (遅い) オモイ (重い) カルイ (軽い)
 カタイ (堅い) キツイ クライ (暗い)
 ケムイ (煙い) ツライ トオイ (遠い)
 ネムイ (眠い) マルイ (丸い)
 アカルイ (明るい) アブナイ (危ない) アヤシイ (怪しい)
 イケナイ イヤシイ (卑しい) オイシイ
 オモタイ (重たい) カナシイ (悲しい) キイロイ (黄色い)
 ツメタイ (冷たい) ヤサシイ (優しい) ヨロシイ
 ムズカシイ (難しい)

『アクセント辞典』と今田を比べると、今田には『アクセント辞典』の27語に加えて、イケナイ、イヤシイ、キイロイ、オモタイの4語が加わっている。こ

形容詞アクセントの実態調査

谷 口 すみ子

1. はじめに

日本語のアクセントは地域によって大きく異なっている。また、「ことばは生きている」と言われるように、時間の流れと共に少しずつ変化していく。同一方言地域においても個人によりアクセントは異なり、さらには同一個人が発音の中にも変動が観察される。

本稿は形容詞のアクセントを取り上げ、若年層のアクセントが従来言われてきたアクセント規則とどのように異なっているかを明らかにすることを目的としている。

2. 形容詞のアクセント規則

2.1 『明解日本語アクセント辞典』のアクセント習得法則によると、形容詞のアクセントは名詞にくらべて型の数が少なく、「二拍語は一種類、三拍以上の語は各の拍数について二種類の型しかない。つまり、平板型と最後から二番目の拍まで高い型とである。」と述べている。(ただし、 $\overline{\text{オ}}\text{ーイ}$ (多い) のように長音のため、アクセントの下がり目が前にずれたものも例外的にある)

二拍語	頭高型のみ	$\overline{\text{〇}}\text{〇}$	例:	$\overline{\text{ヨ}}\text{イ}$
三拍語	平板型と中高型	$\text{〇}\overline{\text{〇}}\text{〇}$	例:	$\overline{\text{アカイ}}$ $\text{シ}\overline{\text{ロ}}\text{イ}$
四拍語	平板型と中高型	$\text{〇}\overline{\text{〇}}\overline{\text{〇}}\text{〇}$	例:	$\overline{\text{ツメタイ}}$ $\overline{\text{ウレシイ}}$

また、「拍の数に関係なく、型の同じ語はそれぞれ似た性質をもっている」として、「同じ平板式の $\overline{\text{アカイ}}$ 、 $\overline{\text{ツメタイ}}$ の連用形は、 $\overline{\text{アカク}}$ 、 $\overline{\text{ツメタク}}$ と同じように平板式となり、同じ起伏式の $\overline{\text{ヨイ}}$ 、 $\overline{\text{シロイ}}$ 、 $\overline{\text{ウレシイ}}$ は、 $\overline{\text{ヨク}}$ 、 $\overline{\text{シロク}}$ 、 $\overline{\text{ウレシク}}$ と同様に起伏式となる」という例をあげている。